

					6	、	ポ	む	華	
					7	や	イ	し	か	ら
					8	り	ン	る	の	相
					9	こ	ト	を	め	手
					10	が	強	が	ら	嫌
					11	こ	と	不	愉	快
					12	が	調	す	る	を
					13	で	が	思	る	逆
					14	き	き	と	に	手
					15	た	に	つ	に	に
					16	か	よ	て	と	り
					17	ら	つ	い	、	、
					18	。	て	る		

[配点]

 その他 1 1
3 1
9 5

 2 2
6 1
1 2

 各4点×14=56点
各6点×3=18点
各2点×13=26点

(同意可)

①

一度目を瞑つてから開くと非日常にいて、隠れた友だちを探すことでの日常を取り戻す構造であり、鬼でなくなるという形で成長を遂げるところ。

(同意可)

②

物語の構造がひんぱんに見られるということ。

②

8	イ	4	お	1	a	8	I	6	逆	2	X
9	エ	5	も	2	b	9	エ	7	造	3	日
10	鉄塔	6	う	3	c	10	ア	8	記憶	4	常
11	孤独	7	つ	泥			イ	9	記憶	5	Y
		8	ぼ	き				10	記憶	6	非
		9	に	き				11	記憶	7	日
		10	て	庫				12	記憶	8	常
		11	(完答)					13	記憶	9	z
		12						14	記憶	10	成長
		13						15	記憶	11	成
		14						16	記憶	12	長

1	a	1	口	2	X
	b	2	伝	3	日
	c	3	証左	4	常
		4	命題	5	Y
		5		6	非
		6		7	日
		7		8	常
		8		9	z
		9		10	成長
		10		11	成
		11		12	長

1

1 a 「口伝」では、「口」を「ク」と読む。b 「証左」については、字形は易しいと思われるが、言葉を知らないと書けない可能性が高い。この場合の「左」は「助ける、補強する」の意味。c 「命題」は、「ここでは「重要な課題」というほどの意味合い。

2 「まさに」という表現から後続部分がまとめ直している箇所であると判断できるので、直前の段落から、□X・□Yは「日常」。

・「非日常」であるとわかるだろう。□Zは「変化」か「成長」であるが、二箇所あるので「成長」しか入らない。

3 傍線部を含む一文を確認すると、「神話や伝説では言うに及ばず」とあり、「神話や伝説では」「何が」「どうである」のかを説明することになる。設問の文言にもある通り「言うに及ばず」は「言う必要がない／言うまでもない」ということで、「ここでは直前の話と同様のことが当てはまる」とを述べている。

4 「現在」・「過去」という時間軸に即した言い回しを「日常」・「非日常」にあてはめてほしい。

5 1 「実名」は「本当の名前、あるいは本名」、「名実」は「名前と内実、すなわち評判と実質」のことで「名実ともに」の形でよく用いられる。4 「見所」は「見る価値のあるところ」、「所見」は「見たところ、またそれにもとづく考え方」のこと。

6 直前の「それ」がさすのは『鶴の恩返し』の構造および結末であり、それが「典型的な例」として述べられていることから、何の例かと考えれば直前の段落から答えが導ける。

7 文章中の問いかけは話題を示していると言えるので、つねにその答えにあたる内容をたどっていくという方向性で読み進めよ。

8 I みなが小さいときからしていることだと「再確認」しているので、「実は」が入る。

II 現代だけでなく、大昔からということを論拠の補強として挙げている。

III ——線部⑤の直後で問い合わせに対する答えを提示したあとで事例を述べ、それを再度まとめるという典型的な展開になっている。この設問に設間に合わせて、具体的な「かくれんぼ」の流れの中から「物語的」、すなわち「日常→非日常→日常」という往還による「成長」という箇所を引き写す。

10 傍線部の続きが「ということでしょう」であることからも、「ここまで」での事例の解釈を求めていることがわかるだろう。この設問についても本文以上に語彙的なレベルが高い選択肢が並んでいるので、文脈把握力とともに高度な語彙力も求められた。

[2]

1 a 「原因」はもととなること。「因」を「困」としないように気をつけよう。b 「倉庫」はものを収納しておく場所。c 「興味」

は「興」の字形を慎重に書いてほしい。

2 原則として辞書的な意味にもとづきつつ、辞書に立項されている複数の意味のうちどれかを問うていると考えよう。学校・設問によつては文脈に合わせて具体化するところまで求めることもあるが、大前提として大枠は辞書的な意味から外れないことである。

A 「まぬけな」といった意味が辞書的な意味の中心だが、要するに「場にそぐわない」ということ。

B 「激化」すること。主に、よくないことが進行することに用いる。

C 語の意味としては「古い」ということ。美的な価値が認められたものに使うことが多い。

3 場面を思い浮かべる。「上履きが泥だらけなのだ」とあるが、「それ」に合わせて名詞で終わる箇所を探す。

4 後続部分で「だから私は」と受けつつ、相手の予想外の答えを模索していることからも、「負け」というのは相手の思い通りになることであることがわかる。答えとするにはその意味合いになる言葉を並べかえてつくることになるが、語群から考へるよりは文脈から考えられるようになるのが時間短縮にもなるので望ましいだろう。

5 「だから私も」の「も」から、ここより前に答えがあるはずであることはわかる。その上で、各空所から、嫌がらせをしてきている

当の相手に対しても優位に立つような表現が入ることが分かる。三つめの空所などは内容・構成上の関連性も含めて、離れていては文脈から考へられるようになるので望ましいだろう。

6 傍線部を含む一文を確認し、「言葉をつまらせた華を見て」を認識しよう。そこから、「嫌がらせを主導していた華」および「それ

に対し嫌がらせがエスカレートしている『原因』」をあえてつくような返し方をしていることを記述の解答としてまとめていくことと高得点につながるだろう。

7 直前部分はもちろんだが、それだけではなく、後続部分がそのときの内心の説明になつていてることをふまえて答えを検討しよう。「藤井礼斗は……嫌がらせを受けている」、「私にとつては……ただのクラスメイト」、「私はあんたとは、違うの。同情なんてやめてよね」を合わせて検討し、選択肢と照らし合わせる。

8 「心の中に連れてきていた」のであった。

9 設問に合わせて、「パンを受け取らなかつた」ときからの「変化」を考えたい。するとおのずと検証るべき範囲が定まるだろう。

問7の箇所との変化を具体化することになる。

10 「眺めた、□(8)の向こうに広がるきれいな青空」とあることから、(6—4)の該当箇所を想起したい。個々の情景について

も、特徴的なものはプラス／マイナスなどをざつくりとでも感じておけるとよいだろう。

11 文学的文章は各小間に合わせて個々の場面をイメージしつつ読むことが肝要ではあるが、最終的には同時並行的に文章の全体をとらえて「要するにどういう話なのか」を考えるようにしてほしい。本問については、実は冒頭の数行が「私が成長したあとの感慨を述べた部分になつており、設問にある通りそれ以外の本文が子ども時代の回想という形になつていて。振り返つてみると……と考えると、まとめられるキーワードは冒頭にあるといえる構成になつていた。